

## 記念座談会

## あの頃の関学英文

岩 瀬 悉 有 関西学院大学名誉教授

神 崎 ゆかり 大阪産業大学教授

笹 山 隆 関西学院大学名誉教授

成 田 義 光 大阪大学名誉教授

(50音順)

司会 山 本 圭 子 関西学院大学文学部教授

山本 急遽、福岡先生のリリーフとなりました山本でございます。実は福岡先生は先発として一球だけ投げていらっしやいまして、それが本日のタイトル『あの頃の関学英文』でございます。それでは、お話いただきます先生方を簡単にご紹介いたします。

お席が遠い方から、神崎ゆかり先生、大阪産業大学教授でいらっしやいます。関西学院大学文学部文学研究科のご出身です。ミシガン州立大学大学院に学ばれた後、1980年に非常勤講師として母校・関西学院大学にお帰りになります。80年から92年まで英語および専門科目を文学部でご担当になり、大阪産業大学にて専任職にお就きになり、現在に至ります。ご専門は、以前は **Robert Browning** を中心とするイギリス詩、近年ではアメリカゴシック小説、**Ambrose Bierce** の小説でございます。若い方のために、ゴシック小説に関する専門的、学際的な視点からのご著書もおありです。

お隣が成田義光先生、大阪大学名誉教授でいらっしやいます。琉球大学、ミシガン大学大学院に学ばれまして、教員として母校・琉球大学にお戻りになったのち、大阪大学を経て、関西学院大学で1989年から2000年まで、教授として教鞭をお取りになりました。ご専門は英語学。特にテンス・アスペクト・モダリティを中心になさっています。意外に知られていないことかと思うのですが、もう一つのご専門、沖縄方言の音韻・語彙に関するご研究

## 資料 1

## 座談会「あの頃の関学英文」

志賀勝（1892–1955） 在任期間（1934–55）

『ロレンス』『アメリカ文学史』『アメリカ・リアリズムの文学』

竹友彦雄〔藻風〕（1891–1954） 在任期間（1934–48）

『法苑林』（訳詩集）『神曲全訳』『英文学史』

大塚高信（1897–1979） 在任期間（1946–53）

『英語学論考』『シェイクスピアの文法』『シェイクスピア筆跡の研究』

寿岳文章（1900–1992） 在任期間（1934–52）

『神曲』（翻訳）『本と英文学』『日本の紙』

東山正芳（1908–1993） 在任期間（1949–75）

『ソーロウの生活と思想』『アメリカ文学の展開』『アメリカ文学と宗教性』

蛭沼寿雄（1914–2001） 在任期間（1949–82）

C. S. ルイス『四つの愛』（翻訳）『新約本文学史』『ギリシャ語新約語法』

矢本貞幹（1909–1990） 在任期間（1956–77）

『文学批評のこころ』『イギリス文学思想史』『文学技術論』

中條和夫（1927–1994） 在任期間（1955–94）

『文学と言語』『現代英語の過去と完了』（翻訳）「ベン・ジョンソンの世界像」  
（論文）

## 参考文献

『学匠詩人 竹友藻風 評伝』藤原弘一郎著（私家版）

学院史編纂室および英文研究室にて閲覧可能

「座談会〈竹友藻風 その人と学問を語る〉」関西学院発行『クレセント』第 17  
号（1984）

関学図書館にて閲覧可能

「関西学院大学英米文学会会報」No.1（1954）～No.113（2014）

関学英文研究室にて閲覧可能

もお持ちでいらっしやいます。

お隣が岩瀬悉有先生、関西学院大学名誉教授でいらっしやいます。大阪市立大学大学院、イェール大学、ロンドン大学に学ばれまして、その後、教員として信州大学、大阪市立大学を経て、関西学院大学にて1985年から2003年まで教授としてご勤務になりました。ご専門はアメリカ近現代の詩、モダニズムでいらっしやいます。若い方はご存じないかもしれませんが、学部長、副学長、その他の重職を歴任なさいました。

私のお隣が笹山隆先生、関西学院大学名誉教授でいらっしやいます。ご学歴は旧制大阪大学大学院、ハーバード大学大学院でいらっしやいます。教員としては津田塾大学、大阪大学、大阪市立大学を経て、関西学院大学に教授として1977年から99年までお勤めになりました。ご専門はエリザベス朝演劇でいらっしやいます。これも案外知られていないことだと思うのですが、フランス語とドイツ語に英語同様ご堪能でいらして、フランス語の優れた翻訳書にフランス外務省等から贈られるポール・クローデル賞を受賞なさいています。

それでは、先生方どうぞよろしく願いいたします。

あの頃と言いますと、ずいぶん昔のことが思い起こされますが、笹山先生いかがでしょうか。

**笹山** 笹山です。定年退職して今年で16年目になります。いつのまにか馬齢を重ねて先月84歳の誕生日を迎えました。周りを見渡しますと、上ヶ原で教鞭を執った仲間の中で私が一番の長老になってしまっているようで、それゆえにここに座らせていただいているわけです。今ひとつ、この場での私の存在理由、と言いますと大げさですけれども、それは、私は関学の卒業生ではなく、在学経験では関学と何の関係もないのですけれども、ある事情で、戦後の関学英文科の復興、発展の一番早い局面を、たまたま垣間見る機会に恵まれた一人だということです。そこで、その時代のことを少し話させていたどうかと思います。

具体的に言いますと、昭和20年に戦争が終わって、その時中学3年生だ

った私が、旧制ですから、中学4年を終えて旧制高校の1年生になった、ちょうどその頃であったと思います。たまたま上ヶ原にフラッと出てきました。と申しますのは、私の家が昔から上ヶ原にいくらか農地を持っておりまして、父が小作人といろいろ交渉をするのに年に何回か上ヶ原にやってくる。その時に子どもの私を戦前から連れてきていたわけです。戦争が終わって少し穏やかな時代になり、旧制高校に入った私は生意気ざかりで、学校で学んだり独学で覚えたりして少しばかり英独仏ができるようになると「俺は翻訳家になるんだ」とうそぶいて、外国語を読んでも以外は友達と麻雀ばかりやっている不良文学青年でした。ある日、上ヶ原で正門前を通りますと、「英文学科夏季講習会」という立て看板が出ていました。——これから先のことはどれだけ事実在即しているか分かりません。ピンターの言いぐさじゃありませんけれど、実際にあったことと、あらまほしかったこととは、結局は変わらない、特にこの件について確実性を云々するのはあまり意味がありません。私のイメージの中に今もしっかり留まっている「あの頃の関学英文」の姿だと思って、聞いていただきたいと思います。

旧制高校生ですから高下駄にマント姿で、おそらく受講料も払わないでガラガラッと建物に入って行きました。突き当たりの階段教室の外に確か講習会のプログラムが貼ってあって、2日間で6つの講義があったと思います。今でもある1階の一番奥の部屋です。受講生は、かなり入っていたので、100人はいたでしょう。私が入った日は、(あるいは次の日も私は上ヶ原に出てきたのかもしれませんが)志賀勝、竹友帟雄(とらお)[藻風]、大塚高信、寿岳文章、この4人の方のなかのお3人が講師であったと思います。定かには覚えておりませんが、志賀さんは「ロレンス」、竹友さんは「17世紀イギリスの抒情詩」、大塚さんは「シェイクスピアの英語」といった内容についてお話になり、寿岳さんは「イギリスの社会と文学」と題して、確かウィリアム・コベットの『ルーラル・ライズ』という作品について話されたように思います。私はしびれました。すっかり夢中になりました。内容が分かったわけではありませんけれど、4人の先生方のお話は、何も知らない人間に「一から教えてやる」「蒙を啓いてやる」という積りの、本当に熱の籠

もったお話で、「英文学」というものが、初めて少し自分の目に見えてくるような気がしました。それまで私は大学は独文に行こうと固く決めていたのですけれど、それをいっぺんに変えてしまって「英文学をやるう」、さらに、ここにおられる4人の先生方の誰かに、明日にでも弟子入りしよう、と思いました。実際に次の月に竹友藻風先生に弟子入りしたんです。文字通りの弟子でありまして、一週間に3,4回くらい先生のお宅に伺って、何時間か先生と生活を共にさせていただきました。「先生の声を聞いているだけで幸せ」という状態でありましたので、先生の話されることには、フランスの象徴詩であれ、ミルトンであれ、ペイターであれ、なんでも必死に耳を傾けました。時には、当時仁川にはセキレイなどの野鳥がたくさんおりましたので、野鳥好きの先生の真似をして双眼鏡で眺める、というようなこともしました。こんなふうに申しますと、生意気盛りの何も知らない若造が、大人の文学論をちょっぴり聞かされてえらく感激しただけだろう、と言われるかもしれませんが、必ずしもそうではなくて、実際に関学の夏季講習会のレベルが高いことは、全国的に認められておりました。戦前からあって、戦前の『英語青年』を読みますと、広告だけでなく講習会の内容についての批評的コメントもかなり見られますし、全国から聴きに来る人も多いので、関学はそういう人たちのために宿舎を提供するという記事まであって、盛況であったようです。それは、いろいろ理由はありましようけれど、何と言っても顔ぶれの豪華さゆえだったんだらうと思います。4人の先生方が関学の戦後のルネサンスの輝かしい担い手であったのは明らかです。

志賀先生は英文科の中心であった方です。結核で、私が亡くなられる前にお会いした時は、布団に入っておられて枕元でお話をするというようなことでした。戦前からの、アメリカ文学だけじゃなくて、イギリス文学も含めたいわゆる現代英米文学について非常にお詳しく、鋭い評論を次々にお書きになっておられたようです。頭脳明晰、しかも印象批評ではなく非常に理知的に論を立てて、文学論をおやりになっていたように私には思えました。

私が弟子になりました竹友先生は、詩人として10冊ほどの詩集があります。ミルトンから現代詩まで、ダンテからフランス象徴派詩人に至るまで、

日本の古典では、古事記から徳川時代の黄表紙本に至るまで、内外の万卷の書物を渉猟しつくした恐ろしく博学の方で、私は一番影響を受けましたし、この歳になっても「一番尊敬される先生はどなたですか」と聞かれれば、即座に「竹友藻風」と答えます。あれだけ本を読んでその内容をちゃんと自分の頭に入れている英文学者は、後にも先にもないんじゃないかと思っています。ご著書、翻訳書は50冊を超えるでしょう。戦争中も防空壕の中で『神曲』の訳をされていたということです。

大塚先生については後で成田さんがお話になるとと思いますが、英文法、英語学の泰斗であり、いろんな辞典のエディターでもあって、大塚高信の名前がない辞書、辞典はほとんどないような感じでした。同時にまた書誌学者でもあって、シェイクスピアの筆跡とか版本とか、シェイクスピアの書誌学についても、おそらく日本で一番早く取り組まれた方です。寿岳先生はちょっと毛色が変わっていて、英文学者であると同時に、みなさんご存じのように、柳宗悦流の民芸、民俗学方面でも非常に大きい足跡を残された方です。特に和紙、日本の紙については多くの著書がありますし、一番の専門家であったと思います。英文学者としては、竹友先生のように対象の中に自らを投じて印象的に語るというタイプではなくて、社会と文学の繋がりを冷静に見つめていくというタイプの方でした。竹友さんと寿岳さんの間には友情と同時にある種の敵対心があるように私には思えました。『神曲』の翻訳について言えば、竹友先生のは勿論ですけど、寿岳先生の『神曲』の翻訳もまた大変優れたもので、おそらく現在、世界文学全集に入っているものとしては、寿岳訳が一番多いんじゃないかと思っています。

私自身に話を戻しますと、先ほど申しましたように大学は関学に席を置いてはいなかったんですけども、竹友先生とお近づきになったことを通して、上ヶ原のキャンパスで、あるいは仁川河畔の竹友先生のお宅で、他の先生方とたびたびお目にかかり、そしてそのうちに、その先生方が私を研究室に呼んで話して下さるといふ、ありがたい恩恵に与りました。そういう意味で、私は私自身の英文学研究のいわば原点は、関学の英文科、英文教室にあると今でも思っています。

しかしながら、この4人の先生を中心とする豪華な顔ぶれは、長くは続きませんで、昭和23年に竹友先生が阪大へお移りになる。翌年、志賀先生がお亡くなりになる。やがて大塚先生、寿岳先生も甲南大へ移られることになって、関学ルネサンスの輝かしき星たちは上ヶ原のキャンパスから消えていくわけです。ただ、今から考えますと、それは関学から大物がいなくなって小物ばかりになったという意味では、決してありません。昭和25年ぐらいいから全国的に、英米文学研究者の間に一つの変化が起こりつつあったんじゃないかと思います。戦前の医学部が、内科教授1名、外科教授1名で、一人の教授が肺も心臓も胃も何もかもを診察していたのが、戦後だんだんに専門化して、科が細分化してきたのと同じように、英米文学研究でも専門化が進んで、それに伴ってスタッフの数が飛躍的に増えてきたわけです。そういう波の中で関学英文科も進展してきたのだらうと思います。

今申しあげました先生方の後、東山先生とアメリカ人の大変優れた学者であるティール先生が協力して、英文科をまとめておられたような気がします。そのあと昭和31年に矢本先生が来られて、中心的な存在になられます。若かった中條さんがそれを補佐するという形で英文学科は続いていきます。その期間につきましては、他の先生方がお話しくださるだらうと思います。

私は先ほども申しましたように、未だに消えがたいノスタルジーを持って、英文学研究のユートピアであった昭和20年代初頭の関学英文の姿を、ちょっぴり紹介させていただいて、話を終わります。

**山本** 大塚先生と矢本先生のお名前が挙がりまして、岩瀬先生はこのお二方にも大学院生時代に指導をお受けになったと伺っておりますが。

**岩瀬** はい。それでは、その話からいたします。ここには学部の学生さん、大学院の方もいらっしゃると思いますが、その人たちにとっては生まれる前の話を聞かされるので、「え、そんな昔のこと…」っていうことになると思います。

先ほど笹山先生が話しておられた戦後間もない頃、それよりもまだ古い時代のことです。関西学院が旧制の大学になることが学院にとって悲願だった時期があります。1918年（大正7年）発令の大学令にもとづく旧制の大学になったのは同志社大学（1920-）の14年後でした。何故遅れたかの理由は、神戸の土地にアメリカ・南メソジスト監督教会の宣教師たちが降り立つのが遅れたということがあります。さらにもっと古い所へ行きますと、キリシタン禁令が解かれるのは明治6年（1873）のことですが、その直後に東京ではミッション系英学塾ができるのですね。青山、立教、明治学院が教育機関のもとを作っていますし、関西でも神戸女学院、同志社がそうです。関西学院大学はずっと遅れています。アメリカ・南メソジスト監督教会の宣教活動にとっては、神戸はそれほど魅力的ではなかったようですが、ランバス父子の日本への熱意によって（『関西学院大学百年史通央編Ⅰ』第1章第2節参照）125年前の1889年に神戸に関西学院の基礎が開かれます。そして高等学部とか、専門部とか、大学予科という歴史を辿って、旧制大学になるわけです。先ほどの竹友、志賀、大塚、寿岳、そういう方たちの在職年を見ると1934年に揃っているでしょう。それが関西学院大学が旧制大学になった年です。文部省の旧制大学令から16年遅れていました。その時は法文学部でした。

それから突然23年後の私の話になりますが、私は大阪市立大学の大学院生でした。その時に矢本先生が非常勤講師でお見えになりました。Oxford World Classicsの*Modern Essays*を使われて、院生1人に1人の批評家ないしは評論家を担当させたのです。私はハーバード・リードを持たされました。半期の講義だったんじゃないかと思います。リードのエッセイを読まされまして、何が書いてあるかを発表させられます。“骨”の所は必死で理解できても、そこに付けてある“肉”の部分ですね、そういう所に入りますと矢本先生は「そんなのはどうでもいいんだ」と言わんばかりに退屈そうな顔をされるんです。「結局どうなの」というのが最後の非常に恐い質問でした。「リードがどういう姿勢で、何を結論としたの」、「それはリードにとって何の意味があるの」と聞かれるのです。それだけと言ったら悪いのです



が、そういう質問が一番恐い。それを各批評家について尋ねられました。そういう授業でした。それは昭和 32, 33 年、私が修士課程の院生のときのことです。矢本先生は“骨”すなわち本質を非常に大事にされる方で、大学院の授業にすごい先生が来られたなと思いました。「全部分かってるわ」という姿勢で臨んで来られますから。

英語学では大塚高信先生が見えました。その時は関学の人だと思っていましたけれど、甲南大学に移って数年という時です。そのテキストはよく覚えています、とくにテキストは失いましたけど、*Bloomfield* の *Language* でした。学部では英語史を英語学として習ってきておりましたから突然 *morpheme* にほうりこまれ、大いに面食らいました。テキストを読んで何が書いてあるかを理解する授業のための下読みが大変でした。ただど一方、先生は大変さばけた方でね、「皆さんが分からんのは当然でしょう」と言いながら新言語学の入門を解説して下さったのでした。大塚先生は伝統言語学・英語学の文法論、英語教育について何でも知っておられる方で、広い学識をお持ちの方でした。新生にこのようなテキストを持ってきて、新言語学のことはまだ何も分からない院生に授業をされて、「すごい人が来たな」とびっくりしたのを覚えています。

寿岳文章先生はお越しになりませんでした。先生は 1952 年にはすでに甲南大学に移っていたのではないかと思います。寿岳先生は生涯に亘り私の父と親しいおつき合いがありました。たくさんのお書物をお書きになり、若い時から民芸関係の本を父に送ってきていました。うちでは「寿岳さん、寿岳さん」と親しくお呼びしていました。こんなことを壇の上で言うのも何ですけど、私の父は寿岳さんに私の就職の世話をお願いしておりました（上手くいきませんでしたけれど）。京都向日町にある、日本民芸館に少し似た大変特徴のあるお宅に上げてはくれませんでしたけれど、履歴書を持っていた記憶があります。寿岳さんの家では *Visitors' Book* が非常に大事なものです。多方面の文化人が来訪されたからで、それ自体が 1 つの文化史を形成しているようです。イギリスから来られ、関学と深い関係ができる詩人の *Edmund Blunden*（後にオックスフォードの史学教授）もその一人です。

関学 60 周年記念の時に “A Song for Kwansei” という詩を作られて校歌になっています。東山正芳先生の翻訳がつけられ、今も時どき歌われています。寿岳さんの講義に出られなかったのは残念でした。

志賀勝先生の本を私は学部の際に何冊も読みました。大学院を受験するときに読んだ『アメリカ文学の成長』（1954）は、初版以来数年で 17 回の印刷を繰り返した名著で、いかに多くの学部生・大学院生が読んだかという本です。今でも「大変よく書けてる」「東京のある有名な人が書いた文学史よりずっと良いな」と私は思っています。

私は大学院を修了してから信州大学に勤めたのですが、そこで本当に珍しい人にお逢いすることができました。それは W. H. H. Norman（1905-1987）先生です。関西学院英文科の教授で、後に神学部教授に移られますが、宣教師でもあって、大変日本語のお上手な方です。カナダ・トロント大学とアメリカ・ユニオン神学校で教育を受けられました。私は信州大の助手でした。だからいつも朝 9 時前に研究室をあげ、冬なら暖房の用意をして Norman 先生をお待ちします。フォルクスワーゲンのかぶとむしに乗って朝一時間目の授業に来られるのです。そして、内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』の日本語版の文章を教育学部英語科の学生に翻訳させるわけです。授業開始前に黒板には学生がびっしりと英語訳を書いています。そうするとその狭い行間に、Norman 先生は「どこへ書こうか」とお困りになりながらも誠実に添削されていました。こんなにみっちり英語の書き方をやってもらって、学生たちの能力も上がっただろうと思います。この授業を私は時々覗かせてもらいました。このようなことから食事に呼んでいただいたり、お宅に上がったたりしたことがありました。Norman 先生は、外交官であり日本近代史の研究家の E. H. Norman のお兄さんに当たる方です。

ところで、寿岳文章、志賀勝というような方を育てた方が実はいらっしやることをご存じでしょうか。第 4 代の Bates 院長は「学院の悲願」であった大学創設のために「関西学院の学問的レベルの向上」を願って、東京から何人かの人を招かれました。その中の 1 人に英文学の佐藤清さんがおられ

ました。東大英文科出身の方で、この方が高等学部の学生であった志賀さん、寿岳さんたちを育てられたんです。佐藤さんはわずか10年しか関学にいなかったのですが、辞めて行く時に「後任を誰にしようか」とBates院長から尋ねられて志賀先生を推薦しているのです。その後志賀先生は専門部の教員時代に旧制大学になるために大変な尽力をなさいます。ご自分も業績をたくさん作りながら、同時に大学の仕事もよくお出来になった。旧制大学発足時から法文学部助教授で入られます。寿岳さんは、高等部卒業後京都大学に行かれます。そこで柳宗悦さんたちの民芸運動に深く関わって、和紙の研究の方でも道を開かれます。京大の専科を出てから関学の講師となって戻って来られます。寿岳先生はこの時期の志賀先生との交わりを、“爾汝の交わり（俺、お前で呼べる関係）”だったと書いておられます。そして旧制の大学を竹友藻風のもとでの若い力として支えられたということです。こういう人たちが旧制大学の発足当初からいたんだということを、どうぞ若い方たち（私は学部長経験からこういうことをつい言いたくなるのですが）、誇りに思ってください。本当に良い大学だったのですよ。

志賀先生は1955年に亡くなられました。亡くなられた後に、関学の英文科の先生たちが『志賀勝先生追悼論文集』（1956）を作っておられます。それとは別に志賀先生には『アメリカ文学序説』（1948）という書物があったのですが、その改訂・再版を親友の寿岳先生がお世話をして作るのです。つい先日亡くなった友人の業績全体を見て、彼の業績ではこれが一番良いのだ、文学研究の方法論をしっかりと考えた人だという位置づけで、志賀先生がすでに書かれた旧著から、「ここはどうも納得いかないな」という所を省き、別な本で書かれていたもの的一部分を入れて再販します。二人の美しい友情があればこそできた出版です。これを最近読み返してみましたけれども、やっぱり良く書けた本だと思います。志賀先生のアメリカ文学論は東京の人たちも一生懸命読んだだろうと思います。立派な本です。図書館には当然ありますから時間のある方は見てください。その序文を寿岳先生が書いていますが、その最後に志賀先生の「学統」を継いでいるのは滝川元男さんだと出てきます。滝川さんが出版の庶務的事務と細かい索引作りをされました。佐藤

清さんは日本で最初に *The Scarlet Letter* を翻訳した人でもありますが大正モダリズムの詩の推進者であり、詩の雑誌の編集をやった人です。そういうこともあって、研究の上でも文学性を大切になさった人のようです。その佐藤さんの信頼がとて厚かった志賀先生、その「学統を関西学院大学に継いでいる」と言われた滝川さん——関学のアメリカ文学研究の伝統がたしかに出来ていたんだと思います。志賀先生の『追悼論文集』に寄せられたアメリカ文学関係の論文には、ある共通点が感じられるほどですから。

最後に、これもみなさんの生まれる前の、昭和 34 年（1959 年）日本英文学会第 31 回大会プログラムを持って来ました。学会政治の 1 つのドキュメントとして読むことができます。当時は新制の大学が横一列に並びそれぞれの大学が自らの存在を主張する大学間競争に入っていた時代です。学会の研究発表の司会者、シンポジウムの司会者・講師に関学関係者を見ますと東山正芳、矢本貞幹、大塚高信先生たちが名を連ねています。特別講演の 1 人は **Edmund Blunden** です。出来過ぎと言えるほどです。関西地区で開催されたということもありますが、日本英文学会の中での関学英文科の力とか地位といったものが、おのずと見えてくるようで興味深いものがあります。

山本 岩瀬先生は滝川先生のお名前を挙げてくださいます、更に、佐藤清先生まで遡って... 一般にも詩人としてよく知られている方ですね、そして、**Bates** 先生、その辺りまで源流を遡ってくださいました。

笹山先生からもお話のありました大塚先生につきまして。成田先生、英語学のお立場からよくご存知であろうと思いますが。

成田 3 人目になりますと、話の糸口を見つけるのが非常に難しいと感じています。志賀先生は確か『英米文学』の題字を揮毫された方ですよ。私は書道に興味があるもんですからいつも眺めておりました。私は英語学ですので大塚先生を流れの源泉としまして、人の流れと言いますか、人脈と言いますか、そういうことをご紹介しますと思います。

## 1 「『Subjunctive は生きてゐる』か」(1948)

1948年は第二次世界大戦が終わった戦後まもなくです。旧仮名遣い。かつことじがあつて“か”があります。これはミスプリントではなくて元がそうなっています。大塚先生は Bradley 『The Making of English (英語の成立)』という本の日本語訳をされた先生です。この本の教科書版があるんです。私などはどちらかと言いますと、大塚先生の詳しい註のついた成美堂か

### 資料 2

- 1 大塚高信 (1948) 「『Subjunctive は生きてゐる』か」, 『英文法ノート』泰文堂. Bradley, Henry (1904, 1968) *The Making of English*. Macmillan. 成田義光 (2000) 「仮定法の現在」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』英宝社.
- 2 大塚高信・中島文雄監修 (1982) 『新英語学辞典』研究社. (初版は市河三喜編 (1940))
- 3 大塚高信編 (1970) 『新英文法辞典』三省堂.  
荒木一雄・安井稔編 (1992) 『現代英文法辞典』三省堂.
- 4 大阪英語学研究会 1956年春発足 メンバーは9名 中條和夫, 北山顕正 両氏もメンバー 『英語学』I (1961)~IV (1967)
- 5 『構造言語学』I (1959), II (1961)  
大塚高信「希望と反省」Iの巻頭エッセイ
- 6 語法研究 linguistics か philology か  
『語法の調べ方』(大塚高信編)現代英文法講座 11巻.  
『語法研究法』(荒木一雄)講座・学校英文法の基礎 別巻
- 7 日本英語学会 1983年 初代会長: 安井稔  
近代英語協会 1983年設立 発起人: 荒木一雄, 河井勉男, 宇賀治正朋  
英語語法文法学会 1993年 初代会長: 小西友七  
小西友七 (1961) 「Usage の分類と一般化」, 『英語学』I

Q: Seelig, Tina (2009) *What I Wish I Knew When I Was 20*. HarperCollins.

この本の題の英語は文法的に正しいですか。

ら出ているそっちを学生と一緒に読んだことがあります。この中で **Bradley** は「“**Subjunctive**”は古代英語から中世英語の途中で語尾変化がかなり失われていく」「中世から近代英語までかなり盛んに用いられていた **Subjunctive** は風前の灯火である」「**One generation** くらい経つと消えてなくなるだろう」と書いているわけです。それで大塚先生は話を少し端折って言いますと、「いや、そういう状況ではない」「**Subjunctive** は生きている」とおっしゃりたくて、この論文をお書きになったんです。自己紹介をかねて、おこがましいことで自分の名前を挙げましたが、私も大塚先生の『**Subjunctive** は生きてゐる』か』の論文を読んで、ちょっと 3, 40 年経ってたんですね、**One generation** 以上経っていたので、状況がどう変わっているのか調べてみました。そうすると **Subjunctive** は生きているんです。それで「仮定法の現在」を藤井治彦先生退官記念論文集に載せてもらいました。実はこの原稿を書いている頃、藤井治彦先生は非常に重いご病気で、私は“生きている”とか“死ぬ”とか言う言葉を全然使いたくない状況だったんです。それは鮮明に覚えています。出版は 2000 年ですが藤井治彦さんは 1998 年の 12 月に亡くなられました。明けて 3 月末には退官される予定だったんです。この人が笹山さんが詳しく述べられました、笹山さんが心から尊敬しておられる竹友先生の息子さんです。竹友先生も実は定年を迎えることができないで阪大を退官されたと伺っています。

## 2 『新英語学辞典』（1982）

英語学辞典は何種類か出ていまして、事典も何種類か出ているんですが、1940 年に研究社から市河先生の監修で出されました。辞書の題名は **linguistics** ではなくて **philology** でした。これの新版が 1982 年に出ます。それが『新英語学辞典』なんです、この頃から市河先生に次いで大塚先生他の時代が始まります。中島文雄先生のお二人の監修になっていまして、題名も『**English Linguistics and Philology**』と変わりました。

大塚先生に関しましては学問的に優れた先生であると同時に、弟子を養成

するという点で非常に優れた人であったということがだんだん分かってきました。大阪英語学研究会という会が1956年に発足しています。それは大塚先生のご自宅で研究会を持っていたグループなんだそうです。大塚先生が書いておられるんですが、10人までと人数を制限していたようです。そのメンバーの中に先程からお名前が出ております中條和夫先生が入っています。今までのお話には出ませんでした。北山顕正先生もメンバーであったということです。大塚先生だけじゃなくて、中條先生、北山先生も関学のご出身で、長年関学で教鞭を執られた方々ですので、人脈・繋がりがあったということでここに挙げておきました。

『英語学』という雑誌があるんです。これは古いということもあってあまり知られていないんですが4冊出ているんです。その中に中條先生も書いておられるし、北山先生も書いておられます。他も大勢いらっしゃるんですが、大阪外国語大学の、あれは合併でしょうか、統合でしょうか、名前がなくなりましたが、そこの学長をされた林栄一先生も9名のメンバーの中に入っています。『英語学』はそういう方々が書いておられてⅠ～Ⅳまで出ています。“3号雑誌”という言葉がありますが、何とかそれは逃れて、これは最近亡くなられた荒木一雄先生が「Ⅳ号出たぞ」と編集後記に書いておられます。

これもあまり知られていないのでここに挙げたんですが、『構造言語学』という雑誌もあるんです。1959年にⅠ号が出て、少しあいて1961年にⅡ号が出ています。私の知る限りⅡ号しか出てません。Ⅲ号に達することができなかった雑誌ですが、その『構造言語学』の中に大塚先生が「希望と反省」というエッセイを載せておられます。その内容が英語学の方々にどう受けとられるか分かりませんが、**linguistics** とか **philology** という言葉を聞いて、「**philology** の時代は終わった」「これからは **linguistics** の時代なんだ」、伝統文法の時代は終わって構造文法の時代なんだというような空気があるけれども、それはいかがなものか、と大塚先生はおっしゃっておられます。

1つだけ思い出すことがあるんですが、有名な **Noam Chomsky** 教授が日

本に初めて来られて、1966年だと思うんですが、講演をされたんですね。私はその頃琉球大学にいましたので講演を聞く機会はもちろん得られなかったんですが、NHKが解説を付けて2回に分けて放送をしたんです。そのテープを未だに持っているんです。その中で服部四郎先生が紹介をしています。みんな「構造言語学の時代は終わってChomskyの時代が到来した」と言っているけれども、Chomskyの言語学は、非構造言語学ではなくてジンテーゼだろうとおっしゃっているんです。ジンテーゼという言葉が大塚先生は『構造言語学』でお使いになっていませんけれども、そういう主旨のことを書いておられます。私が非常に感銘を受けたエッセイです。

「linguistics か philology か」という時に、philology も続いていますし、linguistics も続いているんですが、私の見るところ、日本は諸外国と違って語法研究が非常に盛んな国なんです。1959年に大塚先生が編者となって『語法の調べ方』を出しておられて、『現代文法講座』の中に入っています。その弟子である荒木一雄先生が非常に分厚い本『語法研究法』『講座・学校英文法の基礎 別巻』として出しておられます。資料2に小西友七先生のお名前が挙がっているんですけども、小西先生は日本の語法研究に多大の貢献をされた方です。

『What I Wish I Knew When I Was 20.』これは本の題名なんですが、どうですか、みなさん。Seeligはスタンフォード大学の教授で非常に有名な人だそうですが、これは日本語にも訳されて、どちらも日本で非常によく売れているそうです。その本の題名が『What I Wish I Knew When I Was 20.』“20”はもちろん大学生の年齢のことです。息子さんが大学生になった頃に書かれたんだそうです。どうですか、これ。仮定法過去でいいですか。仮定法過去完了？

戻ります。日本英文学会から分家したと言われてます日本英語学会が1983年にできたんですけども、その初代会長は大塚先生の直弟子・愛弟子の安井稔先生でした。

近代英語協会は司会の山本さんの活躍の場ですが、私の調べたところでは1983年の設立になっています。協会の会長は調べられなかったんですが、



発起人が荒木一雄、河井廸男、宇賀治正朋の3人です。宇賀治さんも亡くなられました。宇賀治さんは私ぐらいの年齢だったんです。私の年齢は最初にお話をされた笹山さんより1年1ヶ月若い。それだけが自慢です。こんな大先生の前で（笑い）。

もう一つ付け加えたかったのは、英語語法文法学会です。田中実さんなんか研究発表しておられますよね。今でも活躍しておられるんじゃないかと思うんですが、これは小西友七先生を中心に設立されたと私なんかは見ております。初代会長が小西先生でした。小西先生はもちろん大阪英語研究会のメンバーでした。ですから出身校など全然関係なくできた研究会・同人でした。小西先生も「Usage の分類と一般化」という論文を書いておられます。

山本 「大阪英語学研究会」のところに中條先生のお名前がありまして、中條先生は我々の時代ではイギリスの演劇がご専門だと理解しておりましたけれども、この50年代はまだ英語学がご専門でいらしたんですね。いつ頃に文学のご専門となられたのか分からないのですが。

笹山 中條さんは私の一番古い友人というか、私淑していた先輩ですけれども、最初は今おっしゃったように大塚先生のお弟子さんで、主に英語学方面の論文を発表しておられました。私の推測では、たとえばシェイクスピアのファースト・フォリオは近代になってどういう形でエディットされてきたか、といった書誌学上の大きな問題に関心を持って、ご自分でシェイクスピアのテキストを細かく読んでいるうちに、テキストそのものの方が面白いということになって、だんだんに文学畑に鞍替えして来られたんじゃないかと思います。これは想像ですけれども。

山本 「シェイクスピアの言語に於ける“Shall”と“Will”の用法について」という論考がおありですので、その辺りがちょうど移行期でいらしたでしょうか。中條先生は学生にとって、とても厳しい先生でしたが、先ほど、矢本先生も非常に厳しい先生でいらしたと岩瀬先生からのお話にございまし

た。神崎先生が関西学院大学の大学院にいらした頃は矢本先生はご退職の直前ぐらいだと思うのですが。いかがですか。

神崎 こんにちは、神崎です。イギリス文学の笹山先生、アメリカ文学の岩瀬先生、そして英語学の成田先生と、各分野を代表する先生方の横になぜ神崎が、と疑問に思われる方が多いと思います。山本先生からお電話をいただきましたまして、とにかく案内状を出す日にちが迫っていて、いろいろな方に当たる時間がないので何とか引き受けてくれないかと頼まれました。かなり抵抗はしたのですけれども、本日は恐る恐るこの席に座らせていただいております。ただ、私に3人の先生方ないものがたったひとつあるとしたら、それは今お話にあった錚々たる先生方が築かれた関学英文学科の出身であるということです。

今から45年前、と申しますと年がばれてしまいますが、私が関学の英文に入学したのは1969年のことです。すでにご紹介がありましたように、その当時の関学英文学科には、イギリス文学では矢本先生、アメリカ文学では東山先生、そして英語学では蛭沼先生がそれぞれ中心にいらっしゃいました。1969年は、年配の先生方は良くご存じだと思いますが、大学紛争の年でした。2月に関学の入試がありましたが、その時は正門が過激派の学生のバリケードで封鎖されていたものですから、キャンパスに入ることができませんでした。そのために、入試は今の高等部で実施されたのですが、甲東園駅から高等部に行くまでに通る正門前は火炎瓶が飛んでくる可能性があるということで、私たち受験生は機動隊の盾に守られながら移動したのを覚えています。入学する4月が来ても学内には入れず、6月末までの約3ヶ月間はクラスごとに学外で不定期に集まっただけで、授業が実際に始まったのは7月1日でした。夏休みを返上して授業がありましたが、それでも私は4年間まるまる学業を修めていないという後ろめたさを少し感じています。7月1日の授業開始直前には学生が全員集められまして、過激派たちによって文学部の壁に落書きされた文字をバケツと雑巾で消したり、教室の掃除をしたりという一大行事がありました。それからようやく大学の授業が軌道にの

り、3年生になってかつての英文学科に配属され、2年間のゼミを終えて卒業しました。卒業後、2年のブランクを経て私は大学院修士課程（現在の博士前期課程）に戻って参りました。その時の指導教授がすでにお話にあった矢本先生です。

矢本先生は先ほど岩瀬先生が「恐い質問をされる」厳しい先生だったとお話しされていましたが、私たちをご担当の時は、ご退職の2年前で、学生が孫のような年齢だったこともあってか、あるいはまったく期待されていなかったのか、大変お優しく叱られた記憶がありません。ただそれは、私がついていなかっただけで、あとで考えてみればかなり厳しいお言葉をいろいろいただいていたなという気がいたします。授業中に学生が発表している時、先生は「眠っていらっしゃるのかしら」と思うほど黙然とお聞きになっていらっしゃるのですが、分かりにくいところを取り繕って済まそうとしましたら、「君、それは違うよ」と鋭く指摘されてドキッとした記憶があります。また、学生の準備が十分ではなくて授業が上手く進まなかった時も、授業中には何もおっしゃらず、後で歓談をしていた時に先生がぼつりと「関学というのは甲山を借景に綺麗な大学だね。君たちこんな綺麗な大学にいたら勉強なんか出来ないよな」と眩かれて、大いに反省させられました。論文に関しても、細かい指摘はほとんどしていただけませんでした。最後に一言「うーん。君、これつまらないよ」とぼつさり斬り捨てられたこともあります。たまに、「ちょっと独創的な部分が入っているから面白いかな」とおっしゃられた時は、俄然やる気になったものでした。矢本先生は、「文学作品の論文は、それを讀んだ人がそこで扱っている作品を是非読みたいと思うかどうか。それが決め手になる」とよくお話しになっていました。ですから、私などは時々知識をひけらかすようなものを書くことがあったのですが、そのたびに情けない思いをしていました。

矢本先生の思い出は多々あります。ゼミの授業ではイギリス文学の思想史を主に扱っていらっしゃいましたが、先生が本当にお好きなのは詩で、ご自身も詩人でいらっしゃいました。ただ、「私はなり損ないの詩人だよ」とずいぶん謙遜されていました。お辞めになる直前だったと思うのですが、特別

講義か何かで象徴派の詩の授業をされた時には、いつも寡黙な先生が驚くほど詳細な説明をして下さり、とりわけ熱の籠った授業でした。その時の内容で今も覚えているのは、アメリカの詩人 Edgar Allan Poe の“The Raven (大鴉)”という詩を、Poe の文学理論と照らし合わせながら、詩人である先生の感性でしか理解できないようなこととお話しになって、大変感銘を受けたことです。

矢本先生以外にも大学院ではいろいろな先生にお世話になりましたが、矢本先生がご退職になるのと入れ替わるように笹山先生が関学にいらっしまいました。それまで、特に私などは矢本先生の優しさに甘えてのんびりした大学院修士課程を過ごしていたのですが、笹山先生がいらっしまった途端に大学院の空気ががらりと変わりまして、ピリッと張り詰めた雰囲気になったのを覚えています。笹山先生の演劇史の授業を受講させていただきましたが、それはもう本当に“**Well-organized**”な授業で、文学研究に対する姿勢を学びました。その時、矢本先生から中條先生が博士課程のゼミを引き継がれ、指導教授でいらっしまいました。中條先生と笹山先生は先ほどもお話がありましたように仲がよろしかったので、中條先生が笹山先生に負けまいと私たちに非常に厳しく当たられたのを有難いと同時に、やや恨めしく思っていました(笑)。

その他に当時、森安綾先生や杉山洋子先生といった女性の先生がいらっしまいました。お二人の先生とは卒業後もずっと親交を深めて参りました。

さまざまな先生にお世話になった関学英文は素晴らしいところですので、今日ご出席の若い学生さんも、ぜひ関学の英文で頑張って、卒業後もご活躍していただければと思っております。

私からひとつ質問させていただきたいのですが、笹山先生、岩瀬先生、成田先生は、他大学から関学に移ってこられました。他大学の学生と関学の学生を比べた時にどのような印象を持たれたのか、非常に興味がありますので、ぜひお話を伺えたらと思います。

山本 3人の先生方は国立・公立大学にお勤めのご経験がおありですので、

いかがでしょうか。

笹山 そうですね。これは学生に責任があるのか、それとも教師の側の問題なのか、むずかしいところですが、教師の側の問題として捉えますと、いわゆるエイジングということで、教える人間も若い20代の駆け出しから60代の定年の間際まで、さまざまに変化していく。そうした教師と学生との相関関係で考えなければならないんだろうと思います。私がハーバードの大学院に入りましたのは、いわゆるフルブライト留学生制度の第一期生としてです。その頃日本の大学では、アメリカ・イギリスの新しい作家の名前すら学生は知らない。ようやくヘミングウェイとT. S. エリオットくらいが、英文学生の知っている名前であった時代です。私がハーバードの寮に入った次の週に、廊下で踏んづけた雑誌類の中に、新聞を半分に折ったくらいの大版の『ライフ』誌がありまして、そこに骨ばかりになった巨大な魚がぶらさげられている写真が載っていました。ヘミングウェイの『老人と海』がそのイラストと一緒に、『ライフ』誌の読み物として掲載されていたのです。そういう時代ですから、例えば形而上詩の授業に出た時も、「これは第8のアンビギュイティである」と先生が言うのですけれども、「第8? 何で第1から第7まで教えてくれないんだろう」と思いました。実際私にとっては何から何までが新しい。その上フルブライト留学生は成績がB以下だと、即座に奨学金停止で日本に送り返されるということでしたから、定期試験だけでなく月例試験があるだけでも、1晩も2晩も徹夜したものです。さらに、いわゆる新批評の時代でしたから、テキストを非常に細かく分析をすることを求められました。こういうのが文学研究だと思って日本に帰ってきて、私は最初、東京の津田塾大学に津田梅子以来初めての男性教員として入りましたが、とにかく英文科で教えるということはハーバード流にやるということだと決めて、まず教科書にはクリアンス・ブルックスの『アンダースタンディング・フィクション』を選び、そのほかにハーバードで使った分厚い参考書を、当時の学生にしたら大変な負担だったんだろうと思いますけれども、わざわざアメリカから取り寄せて学生に使わせる、というようなことをしまし

た。学部ゼミでは現代劇をやっていたのですが、クラスの平均点に 61 点を付けて学長から呼び出されました。「笹山先生、いくら何でも全体の平均が 61 点というのは…」と言われ「僕にすれば 1 点を増やしただけでもおまけのつもりなんです」と答えた覚えがあります。私は 22 歳の時にハーバードへ行って 23 歳で帰ってきているものですから、何事にも若さと無鉄砲な勇氣で取り組むという感じでした。またそのつもりで学生を教えますと、学生もある程度ついてくるものです。その後大阪大学に戻ってきた頃から、だんだんにこちらが墮落していったんだろうと思います。そんなに厳しい点を与えていたんでは、こちらの方がクビになるんじゃないかという心配があったものですから、自然に甘くなっていきました。大阪市大に行った頃は中年になっていましたから、おそらくもっと穏やかな先生になっていたと思います。関学に来た頃にはかなり墮落が進んでいたことでしょう。多分矢本先生も同じだったのではないのでしょうか。私が先生に大阪大学で 3 年間お世話になった時には、随分厳しく鍛えられたものですけれど、関学に来て教え子たちに接した時、あれだけ厳しかった方が何と生ぬるい授業をしておられたんだろうと、正直思いました。学生たちに発言させますと、それぞれ自分勝手なことしか言わない。何よりも欠けているのはディシプリンだと思ったものですから、まず方法論の講義を半年間やりました。とにかく自分勝手にやるということほど愚かしいことはない。当時、「春の小川はさらさら流る」の「さらさら」というのは子どもには難しいので「ちゆるちゆる流る」とすべきだという教育論がありましたが、私は、まず定型というかディシプリンというものがあるって、それを確認した上でそれを否定し、それを乗り越えて行ったところにこそ、はじめて自由があるのだと考えていました。関学の学生たちの、良く言えば自由、悪く言えば放埒に我慢できなくて、少なくとも初めの年、あるいは 2 年目ぐらいまでは、厳しくやっただけです。その後はこちらがだんだんだらけてきましたから、どうなったかよく覚えておりませんが、矢本先生も同じように、私が教わった頃は、東北からお見えになってあまり年月も経たない時代でしたから、非常に厳しく鍛えられました。ただ私はわりと可愛がっていただいて、自分で言うのはおかしいですけ

れど、卒論でベン・ジョンソンというシェイクスピア時代のかかなり難しい喜劇作家の作品について書いて、矢本先生に「98点で不満かね」と言われて、ちょっとビックリしたことがありました。矢本先生から98点の卒論の点をいただいたのは、今でも嬉しい思い出の一つです。

成田 関学と元務めていた大学との違いということで数字ではっきり覚えていることがあります。数字というのは阪大の文学部入学定員です。170人でした。関学へ来たたら英文の基準数が170人で、その年はそれをちょっと上回って200人近くいました。これはちょっと驚きでしたね。文学部全体として関学は660人、それは今も変わらない？（770人です）そうですね。

数字ではなくて1つ非常にビックリしたことがあるんですね。1回生で文学部では人文演習といって、それがいわゆる基礎ゼミですが、その基礎ゼミで大学あるいは文学部が完全に学生を把握している。660人入ってくるんですからね。私なんかは数で圧倒されて「どうなるんだろう」と思ったんですが、あの人文演習には良い意味で驚きました。そして学部専門の演習に続いていきますが、シラバスを作るにあたって、あるいは教科書を選ぶにあたって、大きくやり方を変える必要はありませんでした。先ほど98点という点数が出ましたが、私は47年教師をしたんですが、100点をつけたことが1回だけあるんです。それが山口さんというアメリカ文学の人です。今日出席されています。

山口知子（フロアからの発言） 先生がそのことを覚えていらしたということ、今お聞きして嬉しく思います。

成田 1回だけですからね。覚えております。

山口（同上） はい、あのことは私の学部時代の指導教授の先生方とか、みなさんにもお話したんです。山本先生はちょうど研究室が先生のお近くでしたよね？ 社会学部の山本剛郎先生です。そういうふうに申し上げました

ら、「それは、あなたが偉いというよりも、あえて100点をおつけになった(1点減らして99点ではなくて)成田先生が偉いんですね」とおっしゃったんです(笑い)。

山本 さきほどのお話に戻します。岩瀬先生、いかがでしょうか。

岩瀬 学生で言いますと大昔のことになりますので、あまり参考になりません。関西学院の学生はいろいろいます。良くできる人もいるし、私学だから入っているんだなと思う学生もいます。これは正直に認めます。一学年600人、700人もいましたらそういう学生が入ってきて当然ですし、それによって学院は支えられてもいるのです。だから、その学生たちに「教育を受けた」という満足をしてもらえるように、学内の教育制度・指導制度を十分にしないといけない。

私はこういう話題では大失敗してるんですよ。学部の学生の1人が「大学院を受けたいんですけど」とギリギリになって言ってきたのです。私は正直に「競争は厳しいよ。関学の大学院はなかなか良いのが受けにくるから難しいよ」と言った言葉が厳しく受け止められて、その学生は願書を出さなかった。そういうネガティブな指導をすると教師は糾弾されて当然です。糾弾されるべき立場になって困ったなと思ったけれど、心優しい人だったのか糾弾はなかった。でも私としては失敗ですね。ところが、その学生は別の大学院へ行きました。そちらの大学に出す願書に推薦の言葉を書く欄があり、そこに書いてくれとその学生がある日突然現れたのです。「え、君そんなところ受けるの」と言いながらとも角書いたのですが、その推薦状を読んだのは大昔に私が他の大学で教えた教え子の1人だったのです。その後学会で出会ったら、「先生、書きにくそうな推薦状を書きましたね」と笑われました。だから、私が反省しないといけないと思ったのは、良く出来る、普通、いろいろいる学生の中で、早い時期にその人の能力を正しく感じ取ってやる、発見してやる。それができない教師はダメですね。そういう経験があります。先の学生さんは今は大学教員になっていますので、私はほっとしています



が、良心の呵責は消えません。

山本 関学英文の歴史を総覧して、1本の幹が通っているということではないでしょうけれども、いくつか非常に太い節となる時代を築かれた先生方の足跡を中心にお話いただきました。学術的に優れた先生方の力というのは、数十年を超えて影響を及ぼし続けるものであるということ、私たちも関学英文に連なる者としてその中にあるということであろうかと思います。お話はまだまだ尽きなくて、数時間でも足りないのではないかと思います。どうか続きはパーティでお聞きくださればと思います。先生方、本日はどうもありがとうございました。(拍手)

それから、本日笹山先生がハンドアウトでご紹介になった竹友藻風先生の評伝と、会報をまとめたものは英文研究室と学院史編纂室にも保管してございますけれども、本日もお持ちしておりますので、よろしければご覧くださいませ。